「英語学概論」の100年
——何を教え、何を学んだか——

田辺　春美

1．はじめに

戦後わが国の文学部英文科においては、「英語学概論」やそれに類する「英語学概説」「英語学入門」などの名称で、英語学の諸分野を概観し専門的な英語学研究の導入となる科目がおかれてきた。2001年の田島松二氏による『わが国の英語学100年—回顧と展望—』では、過去100年を回顧する理由を、夏目漱石がイギリス留学に出発した年が1900年であり、このころすでに幕末以来行われて来た実学中心の英語研究からは一線を画する英語学研究がおこなわれ、英語史や英語音声学が出版されていたとした[1]（田島　2001：i）。この著書で、田島氏は1900年から執筆時までの100年間において、英語学の諸分野でどのような研究がおこなわれてきたのか、先人の著書・論文を紐解き英語学研究の学問的な発達と成熟をたどっている。わが国の大学教育において「英語学概論」ではどんな事がらがおしえられてきたのかは、そのもとになる英語学が何を扱う学問と考えるのかにおおいによるが、当然担当教員の研究上の立場によってその内容は微妙に異なっている。田島氏の著書はあくまで英語学研究が対象となっているため、大学の授業科目である「英語学概論」においてどのような事がらが教えられてきたのかについてはこの本から知ることはできない。

本論では、わが国の英文科にある「英語学概論」という科目について過去約100年を駆け足でたどり、どのような内容がとりあげられてきたのか、その内容はどのように変化したのかを調査し、英語学研究とその基礎教育のあり方について考察する。調査の方法は、代表的な大学として東京大学文学部

1　長井氏昸『英語發達史』(1900)、岡倉由三郎『発音学講話』(1901)、片山寛他『英語発音学』(1902)、岡倉由三郎『英語発音学大綱』(1906) 参照。田島 (2001: 12) に詳しい。

の題目一覧と「英語学概論」とそれに類するタイトルで出版されてきた図書に含まれる内容の時系列的な異同を文献学的におこなうものである。東京大学文学部の講義題目は、『東京大學文學部学生便覧』と『東京大学文学部便覧』に掲載されているが、現在東京大学の図書館で閲覧できるのは昭和10年（1935年）からである。[2] 平成20年以降29年はすべての授業科目一覧は便覧には掲載されていないが、教員免許状取得必修科目のリストから「英語学概論」が教授されていたことは確認できている。現在、平成30年度分のみ大学のホームページでシラバスが公開されている。

もう一つの調査方法は、英語学の基本を教える教科書及び参考書が取り上げている内容を比較検討することである。最も初期の出版物で「英語学概論」に類する名称の書籍は、1918年に出版された金子健二著の『英語基礎學』である。また、市河三喜著の『英語學：研究と文献』（1936）や大塚高信著の『英語学論考』（1949）にも英語学の基礎的な記述がみられる。この時代から現代まで、どのような出版物が著されたのだろうか？また、英米ではどのような入門書が出版されたのか、特にわが国の英語学界に影響のあったとおもわれる文献を検討する。この調査方法について、大学の教員の中には、必ずしも教科書を指定せずに独自の講義を行ったり、英語学の様々な分野の洋書を講読しながら講義したりするケースも多々あるので、「英語学概論」の出版物だけを見たのでは不十分であると言う意見もあるだろうが、客観的な資料として英語学の基礎を教える文献を考察することは意味があると思われる。本調査を今から過去100年としたのは、昭和初期の英語研究を回顧した大塚高信氏の「わが国に於ける英語学研究」（1938年）が、市河三喜氏が1912年に出版した『英文法研究』を真に科学的英語学研究とし、わが国の英語学研究の礎をこの書物においていることによる（田島　2001：9）。

2.　東京大学文学部の講義題目から見る「英語学概論」

東京大学文学部の講義題目調査では、最近までシラバスが公開されてい

[2] 昭和19－20年、26－27年、29－30年度の『東京大學文學部学生便覧』と34－37年、44年度の『東京大学文学部学生便覧』は、欠本のため未見である。

たわけではないため講義の内容までわからない上に、そもそも東京大学文学部一校だけの調査が適切かどうかは疑問があるが、戦前からの歴史がわかる大学の例として考慮に値するだろう。1877年に創立されたわが国最古の大学である東京大学文学部の英文科では、外国人教師が英米文学英語学研究の基礎を作った。英語学では、比較言語学や文献学的英語学に詳しいJohn Lawrence 教授(1850-1916、在任1906-1916)の薫陶をうけた教え子達がその後の日本の英語学の研究・教育を発展させたことことを鑑みて、講義題目調査の対象とする代表的な大学として東京大学を選んだ。Lawrenceの特訓を受けて、頭角をあらわした市河三喜氏はLawrence急死の後を継いで1916年に助教授として就任し、その後1937年に退官するまで30年に亘って教育研究に大きな功績を残した。昭和10年（1935）から18年（1943）までの講義題目調査からは、短い期間であるが戦前の教育をかいま見ることができる。戦前は英語学、イギリス文学、アメリカ文学の区分が明確ではなく、イギリス文学を中心とする文学と語学と実学的なCompositionの授業と渾然一体となっていた。昭和10年（1935年）に市河教授が担当した科目は、「近代英語学概説」「英語学演習」「英文法演習」の３科目であった。そのうち、「英語学演習」は、括弧内に副題として「Jespersen: Essentials of English Grammar」と付記されていたことから、Jespersenのテキストを読んでいたことがわかる。翌年の昭和11年（1936年）から順に講義科目の題目をあげると、「英語学概論（英独語比較研究）」、「英語発達史」、「英語学の諸問題」、「英語史概説」、「近代英語学概説」、「英語の背景」、「口語英文法 (Palmer: Grammar of Spoken English)」と続く。昭和11年（1936年）に「英語学概論」が講義されていたが、括弧内に副題として、「英独語比較研究」と書かれていたように、専門科目への入門というよりは英語文献学的な内容や英文法に関して毎年テーマを変えて自由に講義していたように思われる。第二次世界大戦の戦況が厳しくなる中、昭和19、20年（1944、45年）の便覧は欠本、終戦直後の21年（1946年）は専修科目一覧のみで題目はかかれていなかったが、英語学英米文学専修の専門科目として、「英語学概論」があげられていた。

昭和22年（1947年）に市河教授が退官した後任として中島文雄氏が着任し、「英語学概論」「近代英語の成立」「英語学演習」を講義した。昭和25年（1950年）ごろまで、中島氏と戦前から市河教授とともに「英詩の英語」を講義していた佐々木達講師と、２名体制で英語学の教授にあたった。佐々木講師の

担当科目は昭和22年（1947年）「英語の諸問題」と「英語学演習」で、その後、昭和23年（1948年）より中島氏が退官する昭和39年（1964年）まで順番に講義題目を挙げると、「近代英語の音韻と文法」「英語学演習(中英語)」（中島）、「英語学の発達」「英語学演習」（佐々木）、「英語学概論」「英語の発達」（中島）、「現代の英語学」「英語学演習」（佐々木）、「英語学研究」「初期近代英語講読」（中島）、「英語学講読（E. M. フォスター）」（佐々木）、「英語学概論」「英語学演習Potter: Our Language」（中島）、「英語の研究」（中島）、「英語学演習（Jespersen: Growth and Structure of the English Language）」（宮部、教養部）、「英語学概論」（中島）、「英語学演習 Onions: Advanced English Syntax」（木原）、「英語学概論」（中島）、「英語学概論」（中島）、「英語学演習Wrenn: The English Language」（上野）、「言語意味論」「英語学概論」「現代英語演習」（中島）、「英語学概論」「現代英語演習」（中島）であった。また、便覧の講義題目には時折使用する洋書のタイトルが添えられることがあり、そこからJespersen, Potter, Onions, Wrennなど当時わが国によく紹介され、研究された文献を講読したことがわかり興味深い。中島文雄氏は、昭和26年（1951年）出版の英語・英米文學講座『英語学概論上』に「英語学概論」を執筆している。のちに、中島氏はWrennの*The English Language*に注釈をつけて研究社から出版した。東京大学文学部の講義題目と照らし合わせると、中島氏は戦後間もなく「英語学概論」という授業科目を確立したと言えるだろう。

昭和40年（1965年）に退官した中島教授の後任として就任した長谷川欣佑氏は、変形生成文法理論の黎明期にいち早く日本にこの理論を紹介したパイオニアであり、その後も指導的な立場で統語論研究を牽引した。東京大学文学部の授業では、平成７年（1995）の退官まで一貫して「英語学概論」の授業を担当し続けた。例外的に、昭和43、51年（1968, 1976年）のように木原講師と下村助教授が担当した年もあったが、毎年「英語学概論」は長谷川氏が担当し、昭和47年（1972年）からは副題として「英語学概論－音韻史・英語史－」「英語学概論：音韻論と英語史」とあるように音韻論と英語史を取り上げる年と、「英語学概論：英語生成文法概説」を取り上げる年と交互に繰り返すというスタイルをとった。その一方で、「英語学演習」では、Langacker, Chomsky, Klima, Grinder & Elgin, Ross, Akmajian, Culicover, Baker, Reinhart, Radford, Lasnik, McCawley, Horrockなどの

著作が教材としてあげられた。英語史関係の授業については、教養部の寺澤芳雄教授、久保内端郎教授、山縣宏光教授のほか、都立大学教授の小野茂教授と忍足欣四郎教授が長く兼任講師または非常勤講師を務め、常に「英語史概説」、「英語史研究」、「英語史の諸問題」、「中世語・中世文学序説」、「中世英語英文学概説」、「中世英語概説」などの題目で授業が行われた。中島教授時代には専任教員も兼担教員・非常勤教員も現代英文法を講じたり、英語史を講じたりしていたが、長谷川教授時代に専任教員が英文法として生成文法を、外部講師が英語史を担当するという分担形式が定着した。

長谷川教授退官後、平成８年(1996年)に今西典子氏が着任し、２年後の平成10年（1998年）に渡邊明氏も就任し、英語英米文学専修課程は英語学の教員が二名の体制となった。今西氏着任のころ、セメスター制の導入により夏学期または冬学期のみの授業が多くなり、講義の種類が増大し複雑になった。今西教授が平成28年度末に退官し、現在は渡邊教授の一名のみが英語学を担当している。平成21年度より学生便覧にすべての講義題目と担当者が記載されなくなったため、教員免許状取得必修科目のリストに掲載されている一部の講義題目しか調査できなくなったが、この体制の元で、「英語学概論」と「英語学入門」の２種類の入門授業が置かれ、今西氏と渡邊氏のどちらかが毎年担当してきたことは確認できた。平成８年（1996年）に今西氏が担当した「英語学概論」は、副題として「言語構造と生成文法入門」と付記されている。平成30年度分に限り、東京大学のHP上に掲載されているシラバスで詳細な内容をしることができる。[3] それによると、渡邊教授担当の「英語学概論I」は生成文法入門、「英語学概論II」は音声学・音韻論、形態論、英語史とつづり字、語構造、音節、強勢、韻律などである。平成８年（1996年）以降、他の英語学の専門科目は、「英文法論」「英文法研究」「生成文法理論研究：論証の方法」「生成文法理論研究：統語論研究」などを専任教員が担当し、さらに外部の講師によって「形態論・レキシコン」「意味論研究」な

[3] 2018年度「英語学概論I」のシラバスは、http://catalog.he.u-tokyo.ac.jp/ug-detail?code=04183001&year=2018&x=31&y=15を、「英語学概論II」のシラバスはhttp://catalog.he.u-tokyo.ac.jp/ug-detail?code=04183002&year=2018&x=30&y=15を参照。

ど統語論以外の分野の授業も毎年ではないができるだけ積極的に開講されている。英語史の授業についても、「英語史概説」「英語史研究」などの題目で教養学部の寺澤盾教授、小川浩教授、非常勤講師として児馬修立正大学教授、宮下治政鶴見大学准教授らが担当してきた。年を追うごとに、文献学的な英語史というよりは、理論言語学的な立場の教員が担当する傾向がみられる。ただし、講義題目からは英語史の授業がない年も散見された。今西氏の時代は、理論言語学がさらに充実したといえよう。

東京大学文学部の場合、長谷川欣佑氏が就任して以来、英語学研究のパラダイムは伝統文法・構造主義的記述文法から生成文法理論に基づく統語論の追究に完全にシフトし、当然のことながら学部の英語学の講義題目リストにも、「英語学概論」の内容にもそのことが色濃く反映して来たといえよう。ただし、東京大学の特殊性にも注意を向ける必要がある。カリキュラム上、3、4年次から専門科目が始まるため専門教育への導入に時間をかけることができない不利な点と、言語学専修課程もあるので理論的な英文法研究以外の多様な言語学関係の科目を履修することができるという有利な点がある。

3 教科書・参考書から見る「英語学概論」

3.1 1960年代以前に国内で出版された「英語学概論」

次に、「英語学概論」のあり方について、教科書や参考書などの出版物から考察したい。最も早い文献で英語学概論を示唆するタイトルが付けられているのは、1918年に出版された金子健二著の『英語基礎學』である。しかし、この本は「古代及び中世英語研究」という副題がついているように、実質的には英語史の書物であった。20世紀前半まで、英語学と英語史は区別しがたいところがあったので、無理からぬことであった。金子氏はこの後この本にさらに加筆して、1932年に700頁をこえる大著『英語發達史』を著した。

昭和10年、20年代の概論書と言える著作を2点紹介したい。1冊は市河三喜氏の『英語學：研究と文献』(1936) である。この本は、辞書類、方言、音声学、音韻論及び英語発達史、文法などの章に分かれており、それぞれ海外の文献を解説しているので、現代の概論よりは難易度が高いように思われるが、市河氏は本書を「『英語學』への序説とか入門とかいうようなもの」(p. iii)と述べている。2冊目の大塚高信氏の『英語学論考』(1949) 所

収の「III英語學の發達」(pp. 182–277)も、もとは昭和10年(1935年)に『英語青年』に連載した英語学研究の歴史を海外の研究を紹介する論考であり、取り上げられている項目が、英語史、現代英語、文語の歴史、単語の研究、外来語の影響、英本国以外の英語、英語音声学、形態論、語形成、Syntax、Stilistik[4]、言語と文化など、現代の目から見ても英語学分野を適切に俯瞰している。戦後しばらくしてやっとタイトルに「英語学概論」と名付けられた書物が現れる。それが前述した河出書房から出版された「英語・英米文學講座」シリーズの１巻『英語學概論上』（1951）である。中島氏は巻頭の「英語學概論」(pp. 5–67)という章[5]を担当した。その内容は、英語学の仕事、英語と印欧語族、英語と文化史、語彙、発音と綴字、音法則、類推作用、文法であった。ちょうどこのころ、オックスフォード大学のC. L. Wrennによる*The English Language*（1949）が出版され、中島氏はこれに注釈をつけて、1954年に研究社より出版した。内容は、中島氏自身の「英語学概論」と良く似ているが、相違点は「文法」のセクションが「語形、語形成及び配列」という名称であることと、「近代英語の作家」や「今日の英語」という章もあったことだ。この注釈本は教科書として長く活用され、1980年に翻訳もでた。中島氏の『英語學概論上』に続いて、小林智賀平著の『英語学概論』（1957）も出版された。英語音声学と英語音韻論、英語意味論、英語音変化、英語意味変化、語原と外来語、文法論、文体論、英語発達史通観、現代英語学展望と詳細に章を分け、全部で400頁を超える分量となっている。本文中、英語史外観と文体論だけで200頁近くとかなり多くの頁数がさかれている。

1960年から80年代ごろまでの時期の特徴は、教科書・参考書としての「英語学概論」よりは、むしろ注付きのWrennの*The English Language*のような、注釈付きの洋書や翻訳本がつぎつぎに出版されたことにある。例えば、1966年にSimeon Potterの*Our Language*の翻訳が、1970年にAlbert H. Marcwardtの*Introduction to the English Language*の翻訳、1972年J. H.

4　ドイツ語で文体論(Stylistics)のこと。当時の学問はドイツから学ぶことが多く、英語学も例外ではなかった。

5　本書に先立ち、中島氏による同名の著書が1948年に東大協同組合教材部より印刷されたが内容は異なる。

Friendの*Introduction to English Linguistics*の翻訳、1981年にMadelon E. Heatherintonの*How English Works*の注釈書（原著1980年出版）、1984年A. E. Darbyshireの*A Description of English*の翻訳が出版されたが、おもしろいことにこれらの本の日本語のタイトルはすべて『英語学概論』や『英語学入門』であった。明治このかた、欧米の書物を読み解き、紹介すると言うスタンスがメインストリームでつづいており、教員は読みやすく語学的な勉強にもなるこれらの洋書そのものを教科書に使って講義したり、学生も翻訳本を参考書として利用したりしながら、英語学の入門的な知識を蓄積した時代だったといえよう。この頃も、その内容はしばしば英語の発達に関する知識とかなり重複していた。

80年以降になっても、洋書の翻訳は引き続き行われたが（グラムリー 1984;フロムキン・ロッドマン　1980、1983、1997：オハイオ州立大学言語学科　1999参照）、言語学の発達が目覚ましくなり、それを反映した日本人による書き下ろしの英語学概論の出版が増えてくる。1981年荒木一雄編著『コンパクト英語学概論』、1987年安井稔著『英語学概論』、1987年石黒昭博他著『現代英語学要説』、 1991年安藤貞雄、小野捷共著『英語学概論』、1995年稲木昭子他著『えいご・エイゴ・英語学』、1997年八木克正, 吉田和男, 梅咲敦子共著『英語学概論』、1997年西光義弘他編『日英語対照による英語学概論』と枚挙に暇がない。この時期の概論書は、概ね英語の史的発達、音声、形態、統語、意味、語用論など英語学の各分野を万遍なく取り上げている。石黒他(1987)は広範なテーマを偏りなく概観する概論書を編集した。西光他(1997)は日本人母語話者を対象とし日英対照という観点を初めて取り入れて、諸分野を詳しく解説している。アメリカで出版されたFromkin & Rodmanの言語学入門書やオハイオ州立大学言語学科編の*Language Files*などがモデルになっていると思われる(両書についてはセクション3.2を参照)。安井(1987)では情報構造の章を、石黒他（1987）では英米文学や文体論、日英対照研究の章も取り上げている。安藤・小野（1991）は半分の分量が英語史でしめられているが、意味論はあつかっていない。八木他（1997）も意味論の章を設けていないが文法に詳しく辞書や語法の章があるなど、それぞれ特徴がある。統語論の扱い方については、言語学史の流れにそって、伝統文法・構造主義言語学の考え方に続き、変形生成文法の枠組みを紹介していくタイプ（安井(1987)、石黒他（1987）(1993)、八木他（1997)）と伝統文法・構造主義に

は全く触れないタイプがあり、1995年中島平三『ファンダメンタル英語学』は後者の例で、統語論（生成文法）、形態論、音韻論、意味論のみで構成されている。

2000年以降は、英語学の守備範囲も広がりますます学問分野の細分化がすすみ、かつ隣接する周辺分野へと研究の裾野が広がった。英語学だけでなく、英米文学分野でも文学の単なる背景知識としてではなく、英米や世界の英語圏における歴史や文化もいままで以上に重要な研究対象となった。また、若年人口の減少という問題とあいまって、わが国の大学の英文科をめぐる状況も激変し改組や再編を余儀なくされた。その結果、英文科のディシプリンの中にコミュニケーションや文化研究が広く取り入れられたことにより、英語学の基礎知識とは何かという基本的な共通理解も以前のような一枚岩ではなくなり多様化してきたと言わざるを得ない。2000年以降に出版された概論書の顕著な特徴は、過去の改訂版が多いことである。例えば、2002年の『新えいご・エイゴ・英語学』は稲木他(1995)の改訂版であり、2007年の八木克正他『新英語学概論』は1991年の大幅な改訂版、2015年龍城正明編著『英語学のパースペクティヴ』は石黒他（1987）の改訂版、2013年三原健一他『日英対照英語学の基礎』は西光編『日英対照言語学概論』から言語学のコアのテーマのみを抜粋編集したものである。改訂の方針としては、1）語用論、2）英語の多様な変種、3）認知意味論の導入、3）英語史の簡素化などの傾向がみられる。1）の語用論は早くは「情報構造」として安井(1987)でも取り上げられていたが、安藤(1991)、西光他(1997)、安藤(2001)、稲木他(2002)、長谷川他(2006)などほとんどの本で語用論の章として扱うようになった。とくに、最も直近に出版された井上逸兵『グローバルコミュニケーションのための英語学概論』（2015）では、ダイクシス、会話の原則、ポライトネスなどの語用論のトピック、談話分析、コミュニケーション論、社会言語学などの内容に力をいれている。同年に出版された平賀正子『ベーシック新しい英語学概論』（2015）はコミュニケーションの分野からみた英語学入門というかわった視点をもっており、語用論とコミュニケーション論に詳しく従来英語学の基本とされた発音、形態、文法研究についての言及は圧縮されている。

3.2　1970年代以降英米で出版された言語学・英語学概論書からの影響

前セクションからわが国における概説書の出版状況がわかったが、英米

ではどのような概説書が出版されたのかについて以下に検討する。70年代以降、アメリカで出版された言語学の入門書として版を重ねている教科書として、カリフォルニア大学ロサンゼルス校のFromkin & Rodmanの*An Introduction to Language* (F&Rと省略)とオハイオ州立大学言語学科編の*Language Files*（LFと省略）がある。どちらもロングセラーで、F&Rは1974年の初版以来11版が2017年に、LFは初版が1979年（未見）で12版が2016年に出版された。これら２つのシリーズとも大部であるにも関わらず日本語訳[6]が何度も出版されていることを見ても、20世紀後半においてアメリカの言語学が日本の英語学研究に強い影響を与えたことがわかる。

両シリーズを比較してみよう。F&Rが多くの協力者を得ながら版を重ねつつも主たる執筆者は、Victoria Fromkin（６版まで）、Robert RodmanとNina Hyams（７版から）に限られているのに対し、LFの方は毎回ことなる編集者が担当してきた。また、章の構成に関して、F&Rは全体の分量が極端に増えないようにしつつ章の増減や順番の入れ替えを行ってきたが、LFは基本的な章立ては前版を踏襲しながら、初期のころの練習問題集という性格を５版から練習問題付き概説書に変更し、12版では総頁数が750頁もある電話帳のような書物になっている。これらの入門書は、80年代から現在にいたるまでの言語学の変遷を教育場面において反映している点で、なかなか興味深い。

一言でいうと、F&RとLFの過去35年の変化は、言語習得と脳科学の記述が増大したことと英語史が姿を消したことである。F&Rは初版から続けた編集方針が６版から大きく変わり、脳科学を最重要視するようになった。初版では12章のThe Gray Matter of Language: Language and the Brain（言語習得、脳科学）は１つの章であったが、じきに分割されて内容が拡充され

---

6 F&Rの訳書は3種類ある。梅田巌他訳『言語とは何か: 現代英語学への招待』（原著２版の訳、あぽろん社、1980：1983）、『言語学の視界』（原著３版の訳、あぽろん社、1997）と緒方孝文、円谷公美恵訳『フロムキンの言語学』（原著７版の訳、トムソンラーニング、2006）。

LFの訳書は、筧壽雄、西光義弘、嶋村誠編訳『ランゲージ・ファイル: 英語学概論』（オハイオ州立大学言語学科編、原書1979、1987年の抄訳、研究社出版、1999）。

た。逆に、８章The Syllables of Time: Language Change（英語史）と９章The Tower of Babel: Language of the World（比較言語学）は別々の章であったが、一つの章に統合された。初版ではこれらとは別に２章に言語の起源を扱う章まであり、史的研究が重要視されていた。同様に、LFでも５版（1991年）までは歴史言語学と英語史は別の章であったが、６版（1996年）以降歴史言語学の章に英語史年表や英語の音韻変化などのファイル[7]が組み込まれ、10版（2007年）以降英語史に関するファイルを退け、一般的なLanguage Changeを扱う章のみとした。新言語学は普遍文法もとめることを最重要の目標とし、1970年代、80年代は、まず個別言語としては英語から分析をすすめていくという方針が共通認識としてあり、言語学と英語学の区別なく研究がおこなわれていた。そのような言語学と英語学の区別をあえて明確にしない状況が、F&R初版（1974）やLFの２版（1982）のような初期の版において英語史という章が設けられていたことに反映されていたといえる。

その他のF&Rの特徴としては、５版（1993）から音声学・音韻論の章が序論の次の２、３章の位置から形態論、統語論の次に下がったことが挙げられる。語用論は初版では触れられていなかったが、その後３版（1983）でSpeech Actsがとりあげられ、少しずつ内容を増やしているものの独立した章にはいまだなっていない。それに対して、LFは音声学・音韻論、形態論、統語論という小さい単位から大きな単位へとすすむ従来型の章立てを堅持し、語用論についても３版（1985）から独立した章として取り上げている。ただし、Variationなどの言語使用の領域は充実しているとは言いがたい。また、著者の一人であるRodman氏の専門がコンピュータ言語学であることからか、F&Rは初版からコンピュータによる自然言語処理が独立した章の一つになっている。

次にイギリスの出版物についても簡単に触れておきたい。近年言語学の各分野に関して、ハンドブックの出版が活発である。そのなかで、2006年にBas Aarts とApril McMahon編の800頁にのぼる大著、*The Handbook of*

---

[7] LFでは、各章は短い単元から成り立っており、一つ一つの単元はファイルと呼ばれている。

*English Linguistics*が出版された。各項目ごとに分かれ総勢41人の執筆者が各自得意とする項目を執筆している。まず「方法論」のパートにおいてコーパス言語学や英文法の記述、データ収集法についてのべ、「統語論」、「音声学・音韻論」、「語彙・形態論」、「変異・談話・文体・語法」のパートに大きく分けて詳述している。F&RやLFと異なっているのは、あくまで現代英文法の記述が中心となっていることである。言語心理学や言語習得、認知意味論への言及がない点も異なっている。また、通史としての英語史もなく、統語構造の変化という章があるのみである。２冊目として、ランカスター大学のJonathan Culpeper他 編*English Linguistics: Description, Variation and Context* (2009)も参考になるだろう。構造 （語用論、テクスト言語学も入る）、英語史、地域・社会変異、書き言葉（新聞、広告、文学作品、テクノロジーなどの分野）、コミュニケーションとの相互関連、教育のパートに大きく分かれ、700頁を超える大著である。教育のパートに言語習得関係の章があるが、脳科学には触れず、ごく簡単な総論にしか過ぎない。特に、書き言葉のパート(English Writing: Style, Genre and Practice)に見られるように、実際の言語使用の分析という伝統的な英語学の立場を大事にしていることがわかる。これらの点がアメリカの言語学概論書とは異なっているのである。また。本書は2018年に２版が出版されて、いくつかの章の入れ替えがあった。その中で注意を引くのは最後にEnglish Investigatingというパートを新たに設け、コーパス英語学と英語学研究方法について述べていることであろう。

4 まとめ

東京大学文学部の便覧による調査からは、中島文雄氏が実質的に戦後はじめた「英語学概論」の授業が原型となり、現在まで続いていることがわかった。しかし、その内容は、中島氏の概論が歴史主義的な立場と科学的文法論に立脚していたのに対して、後任の長谷川欣佑氏の概論は1965年代以降革新的な変形生成文法を中心とする英文法論や音韻論にかわった。さらにその後任の今西典子氏、渡邉明氏においてもその方向性は強まり、研究と概論が直結している。東京大学では20世紀の言語学の変化を簡単に乗り越えたといえる。

英語学の入門を教える教科書や参考書の変遷をみると、ことはそんなに簡

単な道のりではない。50年代から80年代まで、伝統的なアプローチで英語学の基本的なインベントリーが教えられた。1951年に中島氏の『英語学概論上』に掲載された「英語学概論」以降、現代英語を概観する洋書に日本人の英語学研究者が注をつけた教科書や翻訳書が出版され、80年代頃まで長く利用された。その後、日本人研究者自身による概論書が頻繁に出版されるようになったが、変形生成文法の導入には紆余曲折があったようだ。例えば、1984年のダービーシャーは、伝統的な章立ての後、最後に章というステータスもなしに、「変形生成文法」の記述を設けている。まるで、どう扱えば良いのか困ったかのようだ。1980年代、90年代でも、石黒他(1987)や安藤(1991)のように、伝統文法、構造主義言語学の流れをまず説明し、そこから変形生成文法の基本的な考え方を解説する、という方法も見られた。構造主義言語学のIC分析からスタートした方が、句構造規則の概念に繋げやすい。その後、文法の記述に関しては生成文法の立場で記述することが一般的になっていった。F&RやLFだけでなく、最近イギリスで出版された総括的な概説書として、Culpeper et al. (2009)とAarts and McMahon (2006) (2018)を挙げたが、どちらも英文法の文構造の解説には生成文法理論はもはや前提として含まれている。20世紀の言語学の成果として、生成文法による英文の分析は今後も重要となるだろう。その一方で、太田朗氏は変形生成文法がまさに活発化してきた1969年に、「変形文法は、伝統文法がとりあげていたような課題をとりあげ構造言語学がもつような厳密な方法でこれを解決する可能性を開拓したと感ぜられた点に、その発展の要因があると思う。（中略）印象的、主観的な内省に終始して、人を納得させるような検証を怠った時、厳密な定式化、記号化のみに注意を奪われて、定式化される事がらは従来から分かり切ったことでなんらの新鮮味もない時は、変形文法に対する興味が薄れる時である。」（太田　1969：240–41）と述べていたことを振り返ると、60年後の今どのように評価できるだろうか？必ずしも「印象的、主観的な内省に終始」したわけでもなく、「定式化される事がら」に新鮮味を欠いているわけでもないでだろうが、評価は分かれるのかもしれない。少なくとも、多くの人は、極小理論、OT理論と進むにすれて「厳密な定式化、記号化」した理論を難解と感じているのではないかと思われる。

アメリカの言語学入門書であるF&RとFLの時系列的な変化の調査からは、1990年代以降言語習得と脳科学の記述が拡張したことと英語史の記述が簡素

化、消失したことがわかった。これは、80年代以降の言語学の流れとしては予測できることであるが、「英語学概論」としてはどうだろうか？戦後、アメリカに留学した日本人の英語研究者が言語学科に所属すると、母語である日本語の研究を新しい理論的枠組みで行うように指導されることがあり、帰国後日本の英文科で理論言語学を講義することがよくある。60年代から80年代ごろまでは言語学イコール英語学の時代であり、それでも問題なかったが、徐々に乖離が生じているようだ。そのカウンター反応として、最近の日本で出版された概論書やイギリスの概説書に見られるように、地域や社会や場面による様々な変種、語用論や談話分析など実際の言語使用に根ざした分野への目配りがもとめられている。また、言語学と英語学が接近していた時代の感覚で現代の一般言語学のみをモデルとして英語学をとらえてしまうと、英語の史的発達の重要性を見誤ってしまう可能性がある。日本の大学の「英語学概論」においても特定分野に偏ることなく、多様化した英語学の紹介となるように多様な研究の可能性をしめすことが重要であろう。

引用文献

荒木一雄編著『コンパクト英語学概論』荒竹出版、1981年
安藤貞雄、小野捷共著『英語学概論』英潮社、1991年
安藤貞雄、澤田治美共著『英語学入門』開拓社、2001年
石黒昭博、中井悟、龍城正明、高坂恭子『現代英語学要説』(不死鳥英語学叢書) 南雲堂、1987年
石黒昭博、山内信幸、友次克子、北林利治『現代の英語学』金星堂、1993年
市河三喜『英文法研究』研究社、1912年
市河三喜『英語學：研究と文献』三省堂、1936年
稲木昭子、堀田知子、沖田知子『えいご・エイゴ・英語学』松柏社、1995年
稲木昭子、堀田知子、沖田知子『新えいご・エイゴ・英語学』松柏社、2002年
井上逸兵『グローバルコミュニケーションのための英語学概論』慶應義塾大学出版会 、2015年
太田朗「一英語学 (一) 英語学概観」日本の英学100年編集部編『日本の英

学100年　昭和篇』監修土居光知他、研究社出版、1969年
大塚高信「わが国に於ける英語学研究」『英語青年』78巻８号、1938年、229-33頁
大塚高信『英語學論考』研究社出版、1949年
岡倉由三郎『発音学講話』宝永館書店、1901年
岡倉由三郎『英語発音学大綱』三省堂、1906年
オハイオ州立大学言語学科編『ランゲージ・ファイル: 英語学概論』筧壽雄、西光義弘、嶋村誠編訳、原書1979、1987年の抄訳、研究社出版、1999年
片山寛他『英語発音学』上田屋書店、1902年
金子健二『英語基礎學』興文社、1918年
金子健二『英語發達史』文港堂書房、1932年
グラムリー、S. E.、K. M. ペツォールト『英語学の基礎』(*A Survey of Modern English*) 新長馨訳編、北星堂書店、1995年
小林智賀平『英語学概論』東京堂、1957年
田島松二『わが国の英語学100年—回顧と展望—』南雲堂、2001年
龍城正明編著『英語学パースペクティヴ』南雲堂、2015年
ダービーシャ , A.E. (Darbyshire, A. E.)『英語学入門』(*A Description of English)* 大沢銀作訳、竹村出版、1984年
『東京大学文学部便覧』東京大学、昭和23-25、28、31-33、38-43、45-54年、平成1-29年
『東京大學文學部学生便覧』東京帝国大学、昭和10-18、21-22年
長井氏晸『英語發達史』京都、河合文港堂、1900年
中島文雄『英語学概論』東大協同組合教材部、1948年
中島文雄『英語学概論上』(英語・英米文學講座)、河出書房、1951年
中島平三『ファンダメンタル英語学』くろしお出版、1995年
西光義弘編『日英語対照による英語学概論』くろしお出版、1997年；改訂版1999年
長谷川瑞穂編著『はじめての英語学』研究社、2006年；改訂版2014年
平賀正子『ベーシック新しい英語学概論』ひつじ書房、2016年
フレンド、J. H. (Friend, J. H.)『英語学概論』(*Introduction to English Linguistics*)安井稔, 安井泉共訳、金星堂、1972年
フロムキン、ヴィクトリア、ローバート・ロッドマン『言語とは何か: 現代

英語学への招待』梅田巌他訳、あぽろん社、1980年；1983年
フロムキン、ヴィクトリア、ローバート・ロッドマン『言語学の視界』梅田巌他訳、原著３版の訳、あぽろん社、1997年
フロムキン、ヴィクトリア、ローバート・ロッドマン、ニーナ・ヒアムス『フロムキンの言語学』緒方孝文、円谷公美恵訳　原著７版の訳、トムソンラーニング、2006年
ポッター、S. (Potter, S.)『英語学概論』(*Our Language*)吉松勉訳註、千城書店、1966年
マークワート、アルバート H. (Marcwardt, Albert. H.)『英語学概論』(*Introduction to English Language*) 藤森一明訳、八潮出版社、1970年
三原健一、高見健一編著『日英対照英語学の基礎』くろしお出版、2013年
本橋寿太郎『英語学概論』愛育社、1977年
八木克正、吉田和男、梅咲敦子『英語学概論』英宝社、1997年
八木克正編著『新英語学概論』英宝社、2007年
安井稔『英語学概論』(現代の英語学シリーズ　第1巻)開拓社、1987年
山内信幸、北林利治編著『現代英語学へのアプローチ』英宝社、2014年
レン、C. L.(C.L.Wrenn)『英語学概論』新村登美男訳、桐原書店、1980年

Aarts, Bas and April McMahon ed. *The Handbook of English Linguistics*, Wiley-Balckwell, 2006.
Bergman, Anouschka, Kathleen Currie Hall and Sharon Miriam Ross ed. *Language Files: Materials for an Introduction to Language and Linguistics.* 10th ed. The Ohio Sate University Press, 2007.
Bissantz, Anette S. and Keith A. Johnson ed. *Language Files: Materials for an Introduction to Language and Linguistics.* 3rd ed. The Ohio Sate University Press, 1985.
Cipollone, Nick, Steven Hartman Keiser and Shravan Vasishth ed. *Language Files: Materials for an Introduction to Language and Linguistics.* 7th ed. The Ohio Sate University Press, 1998.
Crabtree, Monica and Joyce Powers ed. *Language Files: Materials for an Introduction to Language and Linguistics.* 5th ed. The Ohio Sate University Press, 1991.

Culpeper, Jonathan, Fransis Katamba, Paul Kerswill, Peter Wodak and Tony McEnery ed. *English Linguistics: Description, Variation and Context*, Palgrave, 2009.

Dawson, Hope C. and Michael Phelan ed. *Language Files: Materials for an Introduction to Language and Linguistics.* 12th ed. The Ohio Sate University Press, 2016.

Fromkin, Victoria and Robert Rodman ed. *An Introduction to Language*. 1st ed. Holt, Rinehart and Winston 1974; 2nd ed. 1978; 3rd ed. 1983; 4th ed. 1988; 5th ed. Harcourt Brace Javanovich 1993; 6th ed. Thomson 1998; Victoria Fromkin, Robert Rodman and Nina Hyams ed. 7th ed. 2003; 8th ed. Wadsworth 2007; 9th ed. 2011; 10th ed. 2014; 11th ed. Cengage Learning 2017.

Godby, Carol Jean, Rex Wallace and Catherine Jolley ed. *Language Files: Materials for an Introduction to Language and Linguistics.* 2nd ed. The Ohio Sate University Press, 1982.

Heatherington, Madelon E.『英語学入門』(*How English Works*) 児玉仁士, 阿部一編注、Kinseido, 1981.

Jannedy, Stefanie, Robert Poletto and Tracy L. Weldon ed. *Language Files: Materials for an Introduction to Language and Linguistics.* 6th ed. The Ohio Sate University Press, 1994.

McManis, Carolyn, Deborah Stollenwerk and Zhang Zheng-Sheng ed. *Language Files: Materials for an Introduction to Language and Linguistics.* 4th ed. The Ohio Sate University Press, 1987.

Mihalicek, Vedrana and Christin Wilson ed. *Language Files : Materials for an Introduction to Language and Linguistics.* 11th ed. The Ohio Sate University Press, 2011.

Schaffer, B. Deborah, John W. Perkins, F. Christian Latta, and Sheila Graves Geoghegan ed. *Language Files: Materials for an Introduction to Language and Linguistics.* 1st comp. The Ohio Sate University Press, 1977-79.

Stewart, Thomas W. Jr. and Nathan Vaillette ed. *Language Files: Materials for an Introduction to Language and Linguistics.* 8th ed.

The Ohio Sate University Press, 2001.

Tserdanelis, and Wai Yi Peggy Wong. ed. *Language Files: Materials for an Introduction to Language and Linguistics.* 9th ed. The Ohio Sate University Press, 2004.

Wrenn, C. L. *The English Language*『英語学概論』ed. with notes by Fumio Nakajima, Kenkyusha, 1954.